

吉川英治
時代文庫
補5



隨筆 私本太平記



吉川英治^{歴史時代}文庫 補5

随筆 私本太平記



一九九〇年十月十一日第一刷発行

著者——吉川英治

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二

郵便番号 一一二―〇一

電話 東京(〇三) 九四五―一一一 (大代表)

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。定価はカバーに表示してあります。

Printed in Japan ISBN4-06-196585-9

©吉川文子一九九〇(文2)

講談社

随筆學院圖書館

藏私書章

歴史時代文庫

補5

宮本武蔵
太平記

目次

随筆 私本太平記

7

随筆 宮本武蔵

123

略系図

401

註解

404

読者の投書 駒田信二

408

解説 吉川英治の人間研究 松本昭

410

隨筆私本太平記

新春太平綺語

おそらく、十代二十代の人には一笑にも値しまい。けれど私たちの年齢の者は、平凡なはなしだが、「ああ、元日か」の感慨を年々またあらたにする。昨日の歴史、あの戦中戦後を通して来て、生ける身を、ふしぎに思うからである。そこで去年（昭和三十二年）の正月の試筆には、戯れ半分に「元日や今年もどうぞ女房どの」などという句を色紙にかけて拝むことにしておいた。すると升田幸三氏やら誰やら、つね日ごろ女房泣かせの輩が来ては「おれにも書いてくれ」と請われるまま、ついトソ気分で、おなじ句を何枚も人に書いてやった。ところが中にはそんな甘い文句の家庭円満剤では何の効き目もないらしい呑ンべな亭主どのもあったので、そんな人へは特に「これは細君に上げ給え」といつてはべつな句をこう書いてあげた。

鶯うぐいすやうちの亭主はどこの木に

むかしから、「太平楽」という言葉がある。クリスマスからつづいてまだ不足顔の醒めない「正月の亭主族」のごとき者をいったのだろう。語源は「太平記」以前であるにちがいない。それが古典の太平記に用いられてから謡曲、民劇、小説などでさらに一般化したのである。室町期の記録もの、お伽草子ときぞうし。また江戸時代の小説類などおよそ「太平記」という書題を取ったものは百種以上にものぼるであろうか。たとえば「お伽太平記」「ごばん太平記」「女太平記」「東国太平記」「化物太平記」近年でも「新聞太平記」「何々太平記」など、とてもかぞえきれない。私のこんど書く「私本太平記」もその一つに入るわけである。けれど無数の書名は、じっさいには、ほんとの太平記の内容とは、何のかかわりもなく、ただその「太平」ということばの持つ広さや漠ばくとした思わせぶりに仮托かたくしたものが大部分であるといつてよい。

原典の「太平記」を書いた作者は、小島ノ法師円寂とされている。が、この人の伝記もよくわかっていない。書かれた時代は正平から応安年間（今から約六百年前）ごろだろうと考察されている。いずれにせよ、足利尊氏の死期をまたいだ頃だったらしい。しかし筆者の小島ノ法師は、当時という官方（南朝方）の人であつたから、その物語は多分に一方的であつて、史料として信じるわけにいかない学説は古くからあつた。けれどもまた、北朝方の手に成つた「梅松論ばいしょうろん」という一書もあり、これはむしろ足利尊氏方なので、二書をあわせ見れば、やや公平にちかい客観点に立てぬことはない。そのほか、同

時代の日記物、文書、古記録のたぐいは、古くから現代の歴史家までが、あまねく漁りつくしているので、新発見というような史料は、おそらく今日ではもうありえない。求めてもむりである。

けれどまた、私の拙い作品でも、これが新聞小説となって、世衆の関心にふれてくると、社寺院の開かずの扉や郷土の暗黒倉などから、何が出てくるかわからない。現に、きのうも電話で、私にかくれた南北朝史料を提供したいからという人があり、いままた、この随筆を書いているとき、階下の玄関へ、同様な意味をいって面会を求めきた訪客があるが、礼をつくしてお断りした。この後も、そういう御好意には謝するが、会ったり御返事を書いたりは一切しないつもりである。というよりも、じっさいの小説へ毎日の執筆をつづけ出すと、とても私には時間がない。私の「私本太平記」への目標や文芸構成のことは、べつな「作者のことば」でつくしてある。

さきに私は「新・平家物語」を書いたが、「太平記」は、それにくらべると、おなじ古典でも、時代が下がるし、人の考え方や世の中も一変している。平家には見えたあの優雅な人々の無常観も「あわれ」さもまた文章の詩趣も至って乏しい。総じて文学価値としては古典平家の方が太平記よりも上だとおもう。けれど人間社会のけわしきとか、個々の苦闘とか、また歴史上の日本という国の未成年期山脈をふみ越えて来た祖先たちのあとを振向いてみるものにしては、平家の世頃とは、比較にならないものがある。それだけに、小説としても、生々しい人間臭をもつとおもう。

しかし、これまでの太平記や、いわゆる南北朝概念では、足利尊氏にしろ新田義貞にしろ、また正成・正行父子にしろ、誰の観念の中にも、人間としてはいない。極端なまでに偶像化されたままである。こころみに、私は周囲の高校生や大学初期の若い人たちに試問してみたが、ほとんどがよくもわるくもそれらの史上の人物について知るところがない。わけて、日本の中世歴史中でも重要な五、六十年間において、どんな風に、この国があったのか、北朝、南朝などと分れていたのか、そんな社会の下の庶民や文化の生態はどうなっていたのかなど、中年以上の人でも、今ではすこぶるあいまいになっている。そしてこのあいまいな歴史の密林にたいして、ただ一種の懷疑だけをもっているのが実状ではなかろうか。

ほんをいえば、そんな深い史林^{*}の奥は、私にもわかっていない。けれど私は歴史家ではないのだから、新史料の導きに拠^よらないでも、独自の史観と空想を力に文芸の火を頼りとして、その史林の闇^{やみ}へも、入ろうとすれば入ってゆける。心ぼそいことなどちつともない。読者と共にだからである。だがこれは、さきに平ノ清盛を書いたときにもなめた経験であるが、尊氏などを描いてゆくと、きつと旧観念の尊氏を過信している人などからは相当つよい風あたりが来やしないかと思っている。正成の人となりやらその人格化を人間として描いたばあいなどでも、同様な反撥^{はんぱつ}が予想されよう。だからといって、いつまでも、日本歴史中の胴ナカのような部分を、みんなが、あいまいもこととしておいてよいわけでもあるまい。とにかく、手をつけ出せば、それを機縁として、ほかの

作家もまたさまざまな意図の下に同時代の素材に手を染め出そう。そして自然それが、国民全体の考慮や関心になって来れば、国民的思判も生じ、専攻の史学家諸氏も、一ぱいの研究をこれにそそぐ動機ともなってくるかもしれない。ただしばらくは、私のごとき空想児の逍遙しょうようを笑って見ていたただきたいと希ねがうのである。

まだ小説の方は一字も書かないうちから、ここであってしまうのも率直すぎて他愛ないが、逆賊尊氏も、忠臣楠公も、私には、え、こもひいきも全くない。その時代の下に生きた一個の家庭の父、一個の人間、社会人として、どう描きうるかがまずさしあたっての苦吟である。人間尊氏を私はやはり人間的な気の弱さや人のよさを多分にもった人だっただと思っっている。正成にしても、そうである。みんな社会、みんな周囲が、彼をしてやむなくさせなければ、河内の一田舎武人として、よい妻やよい子にかこまれ、垣かきの梅花を楽しんだり、老後は菊の花でも作って、しごく平凡にまた平和に天寿を全まうとうしたろうにと思われる。その点、かの日柳燕石*くさなぎえんせきが、楠公の詩に「過マツテ武人二生レ」と歌っているのは、偶像楠公にいささか人間の待遇を以て涙しているもので、今の私たちに共鳴される。いずれにせよ、高こうノ師直もろなおのごときは変っているとしても、人みな善人だったと思う。それが、建武年間、正平以後にかけてまで、半世紀余の血みどろを地上に現じ出してしまったのは、いったい誰の所業か、何の作用か、私は人間同士の住むこの世には、何か「誰」と指摘できない摩訶不思議な素因がどこかに跳梁ちやうりやうしている気がしてならない。

小説の中では、そんなものを、つきとめてみたい意欲がするのである。だがそれは、文芸の徒の文芸思惟などでは遠くとどかない永遠の問題であるかもしれない。なぜなら、眼の前にある今日の国際社会においてさえ、なおまだ未解決のままつねに不気味な不安のナゾとなっているからだ。——^{うぐいす}鶯やうちの亭主はどここの木に。——その酔っぱらい亭主のあたまにも、この虚無型の不安だけは、どこにいても消えてはいまい。つい、大それた放言に似てしまったが、南北朝の世をかりて、ひとつその、この世の影なき魔ものの正体を、読者とともに、考えてみようというのが私の意図でもある。そんな小説は、さだめしおもしろくも何ともないだろうといわれそうだが、しかし新聞小説である、私も^{たの}愉しんで書くつもりだし、かたがた、毎日の暮しですらおたがい大へんな今日なのに、その朝ごとの諸兄姉にたいして、なんの足しにも愉しみにもならぬかたい小説などを書くつもりはいささかもない。

終りに。「太平」という語意は、古来どうも、乱世の反語に使われて来たようである。いわば平和の曙を待つ、庶民の悲願がこの二字にこめられて来たものとおもう。

筆間茶話

その一

連載小説の習慣で、ほんらい毎月の初めには“前回までの梗概”が載るのが約束になっている。だが、どうもあれはつまらない。書く方もつまらないが、読者にも中途半端で、あれで要領がえられようとも思われない。

そこでいッそと、こんな試みにかえてみた。月一回を小説定休日としてしまう。そして代りに、私本太平記の篇外雑感とか、臨時の史蹟紀行、作品の補遺などにする。また、時には全篇の梗概ばなしとしてもよいが、とにかく月一回は読者と共に遊ぶ気で、勝手なことを書きたいのである。もし、おいやならやめてもよい。だが何せい長篇である。急ぐ旅ではなし、どうであらうか。

過日の早春日和に、杉本画伯を誘って、栃木県足利地方の史蹟歩きをこころみた。まっ平らな両毛平野も、この辺まで来ると、渡良瀬川をさかいに、平ノ将門以来の坂東の人煙が日光山脈に挟って散在し、赤松の小丘陵の多い起伏の変化もおもしろい。

が、南北朝時代の、ここと鎌倉、ここと京都、九州。その遥けさを考えると、馬の旅でも、千里の感がしのばれる。

まず鏝阿寺を訪ねた。足利市の街中である。濠は旧態をのこしているが、古図に見える林泉や大杉は面影もない。多宝塔そのほかの諸堂も荒れている。住職山越氏の住む階上に、国宝の宋窯花瓶やら尊氏自筆の古文書などが、からくも無事をえている有様だった。

「なにしろ、長い月日、陽の目も見ない寺でしたから……」

と、山越住職は唧って、「今はまあ。そんなでもありませんが、以前は、足利出身の子が東京へ徒弟にでも出ると、逆賊の土地ッ子かなんて、よくいじめられたもんですし、足利織物のレッテルでさえ、逆賊織かと嫌われたという程でしたからね、文部省でも、ここの修理なんてことは、うっかり持ち出せなかったもんでしょうなあ」と、いかにも長い世代の白眼に耐えて来たようなまろい背を、今もかがめたままにいる。

若い高氏のいた頃の居館は、この鑢阿寺ともいわれるが、四囲の地形から市の背後の本城山（今、両崖山^{りやうがいさん}）かと考えられる。本城つまり本庄、足利政所の転訛^{あしかがまんどころ}ではなからうか。

前回まで書いた又太郎高氏の忍び遍歴は、もとより私の創作である。が、時代の風潮、点景人物、後醍醐帝の朝覲^{ちようきん}の儀など、おもなることは「増鏡^{*}」やその他の史実に拠った。——その日、私たちのために案内の労をとってくれた足利史談会の須永弘氏は、高氏の京都出生説をのべていたが、それとて確証はないのである。が、郷土史家の一史眼ではあると思った。

*けんこうほうし
兼好法師の「徒然草^{つれづれがさ}」には、謡曲鉢ノ木の最明寺時頼が、旅すがら、足利家にも立ち寄っていたことが見える。夜物語りの酒のあとで、時頼が土地の織物について訊ねたりしている。ここの機業史はそれほど古い。が今は、繊維工場の煙^{えん}とつが、渡良瀬川をけむらせていた。

足利学校の訪う人もない庭梅と、宋版^{そうはん}の国宝古書籍の真新しさなどは忘れがたい。昔、文盲^{もんもう}の領民が、なにか読めない文字があると、紙キレに書いて、門前の小松に結い^{ゆい}つけておき、翌朝を待つと、それにフリ仮名と解釈が付いていたという言い伝えのある「字降松^{かなふりまつ}」はホホ笑ましい。以て当時の学校なるものの在り方も、よく読める。